河合一樹著
『大和心と正名
――本居宣長の学問観と古代観』
（法政大学出版局・二〇二二年）

水野　雄司

一

本書は、本居宣長の思想を、「正名」という視点から考察することで、新たな理解を試みているものである。先ずはその主旨を、評者の表現も多少差し挟みながらまとめてみたい。

「正名」とは、『論語』にある孔子の言葉である。弟子である子路から、人を治めるには何から始めたらいいのかと問われた時に、孔子は「必也正名乎」（子路篇）と答える。真意をはかりかねている子路に対して、名を正すことで、言葉が正しくなり、言葉による礼や法が正しくなり、よって人が穏やかに暮らす社会ができる。つまり、すべての端緒は「正名」であると述べた。この「正名」は、斉の景公からの問いへの回答でより具体化される。「君君、臣臣、父父、子子」（顔淵篇）、すなわち君臣父子は、それぞれが君臣父子という名をわきまえて生きることによって、世は安寧に治まるという。

この「正名」を、宣長において考えていくうえで、前提となる疑問がある。それは、なぜ宣長は、孔子を評価したのかというものである。宣長は儒教の思想に染まった心を「漢意」と表記し、いかにそれを拭い去るかを動機として研鑽を積み重ね、対抗的学問としての国学を成した。それにもかかわらず、儒教の祖である孔子は否定せず、ときには高く評価している。たとえば鈴木朖に贈った歌に、「聖人といふはひかこと聖人はからのぬす人くしはよき人」（『寛政四年名古屋行日記』）というものがある。儒教で崇められる「聖人」を、「ひかこと」（誤り）であり、「ぬす人」（盗人）とまで貶めながら、一方で「くし（＝孔子）」は「よき人」と結ぶ。これは矛盾のように感じる。

また「儒者名をみだる事」（『玉勝間』第九三条）という文章がある。ここで宣長は、孔子が「正名」を説いたにもかかわらず、それを引き継ぐはずの最近の儒者は「名をみだる」行為ばかりしていると批判する。つまり孔子と儒者を、「正名」を軸に、対立項として配置しているのである。続けて、時代が移り変わる中でも「皇国」は、多くの「名」を守り続けていると述べ、孔子の「正名」を肯定的に捉えることで、日本を賞賛するにまで至る。

この儒教全体と孔子を切り離すかのような姿勢は、賀茂真淵といった他の国学者には見られず、宣長独自の視点と言える。この理由については、今日まで明確な答えが与えられていない。

二

このことを考えるにあたって、宣長が「名」を、どのように捉えていたのかということが重要になってくる。その点において興味深い一文が、『古事記伝』三之巻にある。ここには「神名」という項目があり、宣長の神の定義が書かれている。神とは、古典に載っている神、社に祭られている神、人はもちろん、鳥獣木草、海山など大いなる力をもったすべてとする。非常に有名な定義であるが、注目したいのは、この注釈の最後に出てくる「名と云言のよしは、遠飛鳥宮段の、氏々名々とある下に云べし」という文である。すなわち「名」については、この個所ではこれ以上の言及はせず、参照個所を示すにとどめている。著者はこの一文に注目する。

この「遠飛鳥宮段」とは、『古事記』下巻の允恭記のことである。宣長の言う「氏々名々」というのは、「ここに、天皇、天の下の氏々名々の人等の氏姓の忤ひ過てることを愁ひまして、味白檮の言八十津日の前に、くか瓮を据ゑて、天の下の八十友の緒の氏姓を定めたまひき」という個所である。一見して分かるように、ここでの話題はあくまで「氏姓」についてであり、「名」一般についてではない。しかし宣長は、「名と云言のよし」はここにあるとした。どういうことだろうか。

その本意を知るために、『古事記伝』におけるこの個所の注釈（『古事記伝』三十九之巻）をみてみたい。するとやはり「名」そのものの説明から入っている。「名」の語源を「為」であるとし、人は、物事の「ある状」を「賛称て」名付けるものとする。それから「氏々名々」の説明に入っていく。「古」では、「氏々」によって「職業」が定められており、それが代々引き継がれ「家の名」となっていた。すなわち「其職即其家の名」であり、「其名即姓」なのである。そして「氏姓」という「名」に沿った「職」に従事することが、「天下の政」だとする。日本の「古」は、「氏姓」という「名」によって表された「職業」を、家々が務めることによって成り立っていたのである。

この宣長の捉え方は、他の文章でも見られる。たとえば『直毘霊』には、天皇に仕える「臣連八十伴緒」は、「氏かばね」を重視し、その「職業」を受け継ぐことで「奉仕」しているという記述がある。また儒者である市川匡麻呂への反論として書かれた『くず花』には、「皇国の道」とは、「臣下」が「家筋」を立てて、「職」を代々受け継いでいくことであり、この「道」が実践されることで、「天下は安からによく治まりて、巨害あることなし」と説いている。

こうした「名」についての記述は荻生徂徠の『弁名』への反論になっていると、著者は言う。徂徠によると、「名」をつけたのは「聖人」である。そこから「礼楽」が定められ、それを一般の人々が実践することで秩序が生まれる。したがって「聖人」があらわれる以前は、秩序も何もない荒れ果てた世であった。徂徠派である太宰春台は、日本の「聖人」の立場に聖徳太

子を置き、彼が「名」に沿った多くの制度を定めるまで、この国に「道」はなかったと述べた。

もちろん宣長はこの解釈を否定する。たしかに日本には「聖人」のつくった「名」はなかった。しかし普通の人々が、「賛称て」つけた「名」はある。そのひとつが「氏姓」であり、ここには確固たる「職」の秩序があった。宣長はこのようにして、日本の古代は鳥獣と等しい有様であったという言説を、日本独自の「名」の秩序によって退けたのである。

三

著者によるこうした考察は、新しい宣長像を提出している。なぜなら、これまで宣長は、基本的に「名」を軽視していると捉えられていたからである。

たとえば、京都遊学中に、同じ堀景山門下の清水吉太郎に宛てた手紙がある。その内容は、儒学を奉ずる清水と和歌を好む宣長との論争の体を成しており、「儒」という常識に捕らわれている清水に対して、「足下教へに束ねられ、名に矜り、以つて神形を焦苦し、精身を疲労す」（「宝暦某年某月某日 清水吉太郎宛 草稿」）と書き記す。儒教が提示する「教へ」や「名」といった作為的なものは、本来あるべきかたちを歪め、心を疲弊させるとしている。

また本書でも言及されているように、『直毘霊』には、「実は道あるが故に道てふ言なく、道てふことなけれど、道ありしなりけり」という言葉がある。中国では「道」がなかったために、世が乱れてしまった。そこで「言」による「道」を作らざるを得なかった。一方で、日本には、実際に「道」が存在していたために、世は安寧に治まっていた。よってわざわざ「言」による「道」を作る必要がなかった。このように、基本的に「名」を否定したところに宣長の思想はあったと捉えられてきた。本書はここに楔を打ち込んだのである。

ただし、疑念もある。それはここで指摘されている「名」と「言」の関係性についてである。たとえば宣長は、『古事記伝』執筆のきっかけに賀茂真淵との出会いがあったと、晩年回想している。そこでは真淵が、「古のまこと」ないし「いにしへのこころ」を知るためには、まずは「古言」を知らなければならない、と宣長に話したという（「おのが物まなびの有りしやう」、『玉勝間』第一〇三条）。古事記研究を宣長に托した、いわゆる「松坂の一夜」のエピソードである。

また『古事記伝』の始まりを告げる「古記典等総論」には、「意も事も言も相称て、皆上代の実なり……すべて意も事も、言を以て伝るものなれば、書はその記せる言辞ぞ主には有ける」という表現がある。人間が実際に生きる世界とは異なり、『古事記』は「言辞」のみで構成されている。しかし、「意」も「事」も、「相称て」いるもののため、「言」から訓みとることができる。つまり宣長にとっての古事記研究の主目的とは、古の「意」と「事」を知るために、「言」（「古言」「言辞」）を探求

することにあった。実際に『古事記伝』では、『古事記』の一字一句を取り上げ、他の史料からの文例を豊富に参照し、比較検討することでその意味を追求していく。ひとつの文字に対して、数十行にもわたる注釈は珍しくなく、決して近代の文献学にも引けを取ることはない。

この「言」と、本書での「名」の関係が判然としないのである。そしてこれは、「真心」への問題にもつながる。本書には次のような記述がある。

> 日本古代においては「真心」から人々が「尊び呼ぶ」ことによって秩序を語る「名」が成立するという過程が『古事記伝』において示されていた。(二七二頁)

日本の古代では、全ての人が「真心」を持っていた。そして「真心」から出た「名」であるからこそ、正しく機能し、世に秩序を与えることができた。一方で、宣長の時代の人びとは「漢意」に染まり、「真心」からは遠く離れている。よって、そこから本当の「名」は生まれず、秩序も与え得ない。そのために、「漢意」に侵される以前の「真心」を持った人々が描かれた『古事記』を丹念に読み解いた、ということである。

しかし、宣長は「真心」を、「生まれつるままの心」(『くず花』)として、善悪正邪すべてを併せ持つかのような状態と表現している。世のすべてを理解したかのような儒教の言説に対して、何が善なのか、何が正しいのか、何が真実なのかも、判断することができないのが人という存在である。よって私たちが手にすべきものは、小賢しく世を説明する知性や価値観ではなく、すべての事実をありのままに受け入れる「生まれつるままの心」である。それを宣長は「真心」と表現した。たしかに『古事記伝』は、「真心」を知るためのものである。それは万の「言」を通して、真実の「事」と「意」を知り、これまでの言葉から解放されることを意味していた。

以上は、宣長解釈としては手垢のついたものである。本書でもある程度言及され、その上で、「名」による再解釈を試みている。しかし、「名」と「言」との関係が不明瞭であることから、それが完遂しきれていないように感じる。たとえば、孔子は、「名正しからざれば則ち言順ず」(『論語』子路篇)というように、「言」の前提に「名」を置いていたが、宣長の「言」と「名」もこの捉え方ということになるのだろうか。

四

こうした疑念はあるものの、本書で提示された宣長における孔子像は明瞭なものであった。『孟子』「滕文公」下篇に、孔子が『春秋』をつくった動機が書かれている。周王朝が徐々に衰え、邪説が横行するようになり、臣下でありながら主君を殺める者や、息子でありながら父を殺す者が出てきた。つまり「正名」が成されなくなっていたのである。こうした状況を憂いた孔子が編纂したのがこの歴史書であった。ここには、「古」にこそ真実があり、その様を今の人に伝えるという確固たる意志

が感じられる。そのことに宣長は、強く心を揺さぶられた。

なぜだろうか。それは当時、自身の学問的立場が不安定であったからにほかならない。今日において、明白な歴史的地位が築かれている「国学」であるが、当時は泡沫の新興分野に過ぎなかった。いつ消えてもおかしくない。無くなったとしても誰も気に留めない。それは『古事記』という書物が、研究対象として自明の価値を持っていなかったことも意味する。

宣長は、『古事記』の中に大いなる「古」を見出す。この「古」を一般に開放すれば、悪しき「漢意」を祓うことができる。その目的にむかって、まさに生涯を捧げた。しかし、常にその意志が揺るぎないものであったわけではないだろう。社会的意義が築かれていない行為を、自身の信念だけで支えるには、かけた時は長過ぎる。

こう考えると、孔子の『春秋』編纂のなかに、『古事記』注釈を見出すことは当然のように感じてくる。結果として孔子がもたらしたものは、悪しき「聖人」の道かもしれない。しかし、それは彼にとっての理想の「古」であり、そのことを伝えるために奮闘した行為自体は、宣長の苦闘を大いに支えたのである。

「正名」という学問的目的。

歴史書に向き合うという学問的営為。

この二つの事柄は、確かに本居宣長という人間の骨格を形作っていたのだろう。

日本思想史学の創始者のひとりであり、本居宣長研究の嚆矢でもある村岡典嗣は、「史は決して、例へば鉱脈ば地中に伏在して、発掘を俟つてゐる如きのものでない」（「日本思想史の研究法について」）と述べた。思想史家の作業とは、既存の歴史的事実の確認ではなく、創出である、と。宣長の中から、しっかりとした輪郭を持つ孔子の姿を掘り起こした本書は、久しぶりにこのことを思い出させてくれるものであった。

（一般社団法人倫理研究所専門研究員）